翻　訳

# A.M. カミシェフ著「アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料」

山内　和也[※1]・吉田　　豊[※2]

※1･2　帝京大学文化財研究所

訳者前書き
コインの銘の読みについて
アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料
はじめに
Ⅰ．出土コインの分類と説明
Ⅱ．歴史的考察

## 訳者前書き

ここで翻訳を提出するのは、Суяб, Ак-Бешим, Государственный Эрмитаж (Россия), Институт Истории НАН Кыргызстана, Санкт-Петербург, 2002（国立エルミタージュ（ロシア）、キルギズタン国立科学アカデミー・歴史研究所『スイヤブ、アク・ベシム』サンクト・ペテルブルク、2002年）に収録された A.M. Камышев（A.M. カミシェフ）の論文 “Подъемный нумизматический материал с Ак-Бешимского городища”「アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料」］である。

『Суяб, Ак-Бешим』　は、1996～1998年　に Г. Л. Семенов（G. L. セミョーノフ）が指導して遂行したアク・ベシム遺跡の発掘の学術的な報告書に相当するものであり、そこには当然ながら、出土したコインに関する発掘関係者による報告や分析・研究が含まれていることが期待される。しかし期待に反して、この論文には、発掘において出土したコインの報告や研究は収録されていない。カミシェフはキルギス共和国のビシュケク在住の古銭商であり古銭学者である。ここに翻訳する論文を執筆するに際して、発掘で出土したコインを資料として提供されているわけではないようである。この論文では、彼が個人的に収集したコインをもとにした分析と研究が発表されている。そのような事情は、冒頭の「金属探知機云々」に暗に述べられているのだが、一般の読者には極めて不自然で不可解に見える記述である。

それとは別にこの論文それ自体の内容の理解を妨げているのは、これが、カミシェフが同じ時期にビシュケクで出版したセミレチエ地域における出土コインに関する単著『Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья, История возникновения денежных отношений на территории Кыргызстана, Бишкек, 2002（『セミレチエにおける中世初期のコイン群、キルギズスタンの領域における貨幣経済出現の歴史』ビシュケク、2002）の中から、アク・ベシム遺跡出土のコインに適用できる記述を抜粋したものになっていることである。この抜粋の仕方にはいくらか問題があり、そのため、本論文を読んだだけでは全体の理解が難しくなっているのである。例えば冒頭のテュルゲシュ・コインの説明部分では、「A）大型」と「B）小型」のコインの項目はあるが、本来存在しなければならない「Б）中型」の項目が脱落している。また大型のテュルゲシュ･コインは、著書では「A, Б, B, Г（訳文では A, B, C, D）」の 4 タイプに分類していて、本論文での説明もその 4 分類を前提している。実際、「Г タイプ」の説明が含まれているにもかかわらず、本論文では「Г」の項目が立てられていない。

このような事態を目にすれば、およそ何故彼にこの論文執筆の要請がなされ、これが発掘報告書の一部として出版されたのか不思議でさえある。しかしその一方で、文献史料が極端に乏しいアク・ベシム遺跡（その点ではセミレチエのオアシス都市遺跡はどれも同じである）の歴史を研究するためには、出土コインが提供する情報は絶大かつ必須であり、出土コインに関する項目を立てないわけにはいかない。そこでセミョーノフは、この地域の出土貨幣に精通している古銭学者・古銭商であるカミシェフにこの論文の執筆、寄稿を依頼せざるを得なかったのであろう。逆に言えば、キルギス共和国で行われてきている都市遺跡の発掘では、相当数のコインが出土しているに違いないが、それらについて科学的な

批判に耐える研究を発表できる研究者がいなかったという、この国の特殊な事情がその背景にあるということであろう。

カミシェフは上述した著書において、彼が個人的に収集したセミレチエ地域全体で発見された2300点ほどのコインを扱っている。そしてその大半の2000点ほどはクラスナヤ・レーチカ遺跡で発見されていた（訳出した論文では、クラスナヤ・レーチカ遺跡から出土したコインは2500点以上としている）。したがって彼の著書にある記述からアク・ベシム遺跡出土のコインに関する部分だけを抜き出すことには無理があったのだと考えられる。しかし幸い、彼の著書には彼のコレクション全体をカバーする表があり、つぶさに見ればそこからアク・ベシム遺跡出土の物を抽出することができるようになっていて、彼の説明を理解する助けになっている。今後、帝京大学文化財研究所がアク・ベシム遺跡の発掘を行うに当たって、また過去４年の発掘で発見された20点ほどの貨幣を研究するためにも、アク・ベシム遺跡でこれまでに発見された貨幣に関する先行研究を批判的に検討することは是非とも必要であり、敢えてこのアク・ベシム遺跡出土コインに特化した論文を翻訳することにした。

翻訳に際しては上述のカミシェフの著書にある説明や記述を始めとする関連文献を参照して、論文の内容の理解に資する訳註や補足、補図を数多く加えることにした。さらに便宜のために、全体を３つに分割し、それぞれに見出しを添えた。この論文の下訳はマリヤ・コヴィジャエヴァが行い、山内和也と吉田豊が加筆、修正したものである。文中の［　］で示したものは補訳・補足である。また、本論文全体に関わるコインの銘の読みについては、あらかじめ以下に記しておく。

最後になるが、日本語版の出版を快諾し、図１および図２にあるコインのより鮮明な写真を提供して下さったカミシェフ氏に謝意を表す。これらのコインの写真は本稿の末尾に付録として掲載した。写真番号は、図１および図２の番号に対応している。

本研究はJSPS科研費JP21H04984（基盤研究（S））（研究課題名：シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷―農耕都市空間と遊牧民世界の共存―、研究代表者：山内和也）の助成を受けたものである。

## コインの銘の読みについて（吉田豊）

１．本論文では、ソグド語銘のβγy に対してгосподин「領主、殿様」の訳語を与えている。ソグド語のβγ- という名詞は「神」を原義とするが、一種の敬語として目上の人に対する尊称としても使われる。例えばテュルゲシュのコインの銘でβγy twrkyš x’γ’n pny「神なる突騎施の可汗の銭」とある。この場合、可汗は人間であり神ではあり得ないので、господин「領主、殿様」という訳語が選ばれていることになる。しかしこれはいわば現代人の常識を古代の人々に押しつけているのであって、当時の言語使用者にとっては、可汗は神と比較できる特別な存在であり、敢えてこのような表現を使っていた可能性が高い。ちなみにこの場合のβγy はテュルク語で「天」を意味する tängri に対応しているが、事態は古代のテュルク語でも同様であったろう。翻訳者の１人である吉田はこんな場合、一貫して「神のごとき、神なる」と翻訳している。本論文中では「神なるアルスラン・ビルゲ・カガンの銭」が見られるが、その原語はβγy ’rsl’n pylk’ x’γ’n pny であり、吉田の翻訳が与えてある。ちなみに、ロシア語訳は「Господин Арслан Бильга каган Фан」となっている。

これに対して、やはり本論文中に引用されたコインの銘 xwβw trnβn/ xwβw trnβc/ xwβw tk’yn の xwβw は、xwt’w と同義で、現世の「領主、首領、王侯」を意味する語であり、神とは無関係である。

なお上記の銘の pny のロシア語訳は「Фан」であるが、これはソグド語で銭を意味する pny が漢語の「分」からの借用語であるという理解に基づいている。しかしソグドの pny は梵語の paṇa「銭」からの借用語であることが知られており、もはや従うことはできない。

２．ソグド文字のローマ字による文字転写は1980年以降、いくらか変更されている。大きな変更点は、従来区別していなかった文字 x と γ を区別するようになったことである。これは、x と γ は一見するとソグド文字では形式上区別されず合流しているように見えるが、実際に２つの文字は区別されていたことが発見されたことによる転写の改善である。ただ現在でも、両者を区別しない古い転写法が行われており、本論文でも区別していない。したがって x’γ’n を γ’γ’n、xwβw を γwβw と表記している。

３．「トゥフス・コイン」という名称について。こ

の論文ではこの種のコインの銘のスミルノヴァの読みにしたがって、「トゥフス」という名称が使われている。スミルノヴァの読みが正しくなく、現在では wn’ntm’x と読むべきであることについては、『研究報告』の本号に掲載されているクローソンの論文の翻訳に添えた吉田の解説を参照されたい。

## A.M. カミシェフ著
## 「アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料」

### はじめに

最新の考古学的発見が発表されて以降、研究者は確信を持って、西突厥、テュルゲシュ、カルルクの可汗国のかつての都、より正確にいえば本拠地［可汗庭］であったスイヤブを都市遺跡アク・ベシムに比定している（Горячева, Перегудова 1996, p.186）。近年、この遺跡からは重要なコインの採集資料が得られている。［この論文で］出版されるコインのほとんどは、深さ30㎝まで金属物を検出できる金属探知機を使って地元住民［単数］が収集したものである。この住民が採集した資料はすべて著者に提供されている。

紹介するコインのおもなタイプは、ベルンシュタム A.H. Бернштам（Бернштам 1940）、スミルノヴァ O.И. Смирнова（Смирнова 1958, 1981）、ナスティチ B.H. Настич（Настич 1989）によってすでに発表されている。アイトヴァ C.M. Аитова は、アク・ベシム遺跡で発見されたコインを含め、数種類のコインのタイプを発表した（Аитова 2000, p.126）。［それ以降の］新たな発見により、これまで知られていたコイン群にいくつかの興味深い種類が追加され、チュー川流域における中世初期のコインの年代や地域性に関するこれまでの見解を見直すことができるようになった。コインは、都市遺跡やその周辺で行われた耕作によって混ざり合った文化層の上層で採集されたため、発見されたコインの正確な位置や深さに関する情報はない。また、何時見つかったかも特定されていない。コインは1995年から2001年の間に見つかったもので、これまで発表されたことはない。繰り返しを避けるために、コインのタイプを記述する際には、スミルノヴァの著作『Сводный каталог согдийских монет. Бронза［ソグドコインの総合カタログ。ブロンズ〔コイン〕］』（Смирнова 1981）およびナスティチの論文「Монетные находки с Краснореченского городища（1978-1983 гг.）［都市遺跡クラスナヤ・レーチカ出土のコイン（1978～1983年）］」（Настич 1989）を参照している。

### Ⅰ．出土コインの分類と説明

１．テュルゲシュ［・コイン］。

Ａ）大型コイン（直径23㎜以上）：67枚（Смирнова 1981,［テュルゲシュ］タイプ IV, p.400）。これらのコインは仮に４つのグループに分けられる：３つは技術と品質の顕著な違いにより、４つ目はタムガの形により分類される。[訳註1)]

Ａ－精緻な銘と高い鋳造技法のコイン（図 1. 1）。

Ｂ－解読可能であるが、銘の文字が不明瞭なコイン（図 1. 2）。

Ｃ－崩れた銘をもち、縁が整っていない、質が悪いコイン（図 1. 3）。

第１グループ［A］の精緻なコインの重量は 3.6～5.6g の範囲にあり、最大頻度［ピーク］は 4.6g であることを指摘できる。[訳註2)] 通常のコインの重量の最大頻度は 3.8～4.2g の数値［範囲］にあるが、鋳造品質が低いコインの重量のばらつきがもっとも大きく、最大頻度は 5.4g となっている。重量チャートには、銘が著しく異なる、[訳註3)] 重量 2.0g、2.2g、2.6g と 3.8g の４つのコインは含まれていないが、［これらのコインの］タムガ тамга の図像も特徴的であり、弓形部が方孔の枠と短い棒で繋がっている（図1. 6）。[訳註4)] これらのコインの鋳造品質は高いが、これまでこれらの変種は認識されていなかった。[訳註5)]

これらのコインのうちの１枚は（図 1. 4）、アイトヴァによって発表されている（Аитова 2000, タイプ２）。[訳註6)] テュルゲシュのタムガの左側には、ルーン文字の「R」の形の追加の記号がある。[訳註7)]

もう１枚のコイン（図 1. 5）もタムガの形に違いがある。[訳註8)] 弓形部は菱型［方孔］と接する所で、２つに分かれたようになっている。このタイプのコイン（図 1.8-10）を初めて発表したのはズィヤブリン Л.П. Зяблин（Л.П. Зяблин 1961, p.45）である。[訳註9)] その後、アイトヴァはこの記号をルーン文字の「R」とみなし、[訳註10)]［コインを］模写しているものの、わずかに正確さを欠いていた（Аитова 2000, p.126）。[訳註11)] マークを復元すると、それはルーン文字の「R」に似ているだけであり、右と中央の線の間に追加の「点」が追

加されていることがわかる。 このタムガは、あらかじめ作成された鋳型に追加されたものである。[訳註12)] このマークは、コインの主要な平坦部分[訳註13)]にあって、凸状になっており、さらにほとんどの場合には、主となるタムガの右側に記されるが[訳註14)]、２枚では左側に、１枚は中心軸に沿って、もう１枚は逆に記されている。このコインのタイプは、計2500枚以上も発見された都市遺跡クラスナヤ・レーチカの出土品のなかでも３枚しか見つかっていないことから、都市遺跡アク・ベシムで発行されたと考えられる。追加のタムガをともなうこれらのコインの重量と直径は、［いわゆる］中型のテュルゲシュ・コインと比較するとわずかに小さいが、小型のテュルゲシュ・コインよりは大きい。[訳註15)]

Ｃ）小型コイン。ウラ面は平滑である（直径15～16㎜）：13点（図 1. 11-12）［補図 12 を参照］。

このグループにはどちらの面にも銘がない４枚のコインが含まれ、重量は 0.5、0.6、0.8、1.0g で、直径は 11、12、12、13㎜である。

２．トゥフス［・コイン］

Ａ）大型で（直径19～20㎜）、重量 2.8、2.2、1.7、1.4、2.0g である。合計５枚（Смирнова 1981,［トゥフス・］タイプⅠ, p.405［補図 7.1］）（図 1. 13）。

Ｂ）中型で（直径 15 ～ 16㎜）、重量は 0.8g が３枚、0.9g が２枚、1.1g が１枚。計６枚である（Смирнова 1981,［トゥフス・］タイプⅠ , p.405）（図 1. 14）。

トゥフス［・コイン］のタムガの図像も異なり、重量やサイズが小さいので、これらのコインは別のグループに区別されている。７×７㎜の方孔をもつ２枚のコインもこのグループに入っている（図 1. 15）。

Ｃ）小型：１枚。直径 11㎜で、重量 0.4g である（Смирнова 1981,［トゥフス・］タイプⅡ, p.405［補図 7.2］）。[訳註16)]

３．アルスラン朝［・コイン］[訳註17)]（？）：11枚。

「アルスラン朝」のコインは、「神なるアルスラン・ビルゲ・カガンの銭」と訳される共通の銘をともなう。そのウラ面には、凹状の三叉のタムガの形をしたマークが４つ繰り返されている。いくつかのコインでは、このマークは非常に稚拙であり、方孔から［放射状に］広がる光線のようにも見える。コインは銘の書き方によって３つのタイプに分けられる。

Ａ）このタイプに類似するものは、1953年にクズラソフ Л.Р. Кызласов の指導の下にあった発掘調査の際に都市遺跡アク・ベシムで発見され[訳註18)]、スミルノヴァによって「未知のカガン」という名で、『総合カタログ』に No.1659 として収録された。スミルノヴァによれば、銘は時計回りに「神々の中の神（？）・ビルゲ・カガンの銭 βγ'ny βγ pylk' γ'γ'n pny」と読まれる。しかしながら、リフシツ B.A. Лившиц は、この銘を「神なるアルスラン・ビルゲ・カガンの銭 βγy 'rsl'n pylk' γ'γ'n pny」と読んでいる。直径 20㎜、重量 2.5g と 2.8g、２枚（図 2. 29）。

Ｂ）ナスティチが最初に解読し、発表したもの（Настич 1989, No.32）。銘は反時計回りに「神なるアルスラン・ビルゲ・カガンの銭」と読まれる。直径20～23㎜、重量 2.2g、2.4g が２枚、2.6g、2.7g、2.8g と 3.3g。合計７枚（図 2. 31）。

Ｃ）時計回りに読まれる同じ銘［をもつコイン］。これまで、このタイプは発表されていなかった。直径19～20㎜、重量 1.8g、2.7g（図 2. 30）。

４．テュルクーソグド［・コイン］。オトラル。オモテ面：連珠の縁のなかで歩むライオン。ウラ面：ルーン文字のモノグラム［組み合わせ文字］「N+USH」（Смирнова 1981, No.1578 および 1579, p. 394）[訳註19)]。直径20～21㎜、重量 1.75g（欠損あり）、2.6g（孔あり）（図 1. 17）。

1988年、歴史の教師、シュナイデル C. Шнайдер が、都市遺跡アク・ベシムでチャーチのコイン（ルトベラーゼ Э.В. Ртвеладзе による解読によれば「領主タルナワチ Тарнавач」[訳註20]、７～８世紀）を採集した。重量 1.8g、直径 18㎜［補図９を参照（Камышев 2002, p.90, No.15）］。オモテ面では、走る肉食動物の図像は残っておらず、ウラ面にはフォーク形のタムガと「領主タルナヴァチ Государь Тарнавач」というソグド語の銘がはっきりと見えている。[訳註21)] 現在、このコインはキルギズ－ロシア（スラヴ）大学の博物館に保管されている（Камышев 1999, p.55）。

５．唐朝の中国コイン（621 ～ 906 年）

Ａ）「開元通寶」タイプ。直径23～24㎜、18枚（図 1. 18）。

Ｂ）「乾元重寶」タイプ。３つの額面のコイン。一銭：直径20～21㎜、重量：1.9g が２枚、2.7g と 2.9g。４枚のすべてのコインは非常に鋳造の質が低く、現地

の模倣銭であろう（図 2. 19）。十銭：直径 25㎜、重量 3.75g（図 2. 20）。五十銭：直径 28㎜、重量 6.75g（［銘の］文字のところに直径２㎜の４つの孔がある）（図 2. 21）。[訳註22)]

Ｃ）「大暦元寶」タイプ。直径21～23㎜、重量：2.65g が３枚、2.5g が２枚（１枚のコインの孔は直径11㎜に広げられており、コインの直径は 21㎜。鋳造の質が非常に低く、現地の模倣銭であろう）（図 2. 22）。

Ｄ）「建中通寶」タイプ。直径 20㎜、重量：1.65g が２枚と 2.2g。計３枚（図 2. 23）。

６．中国コインの現地の模倣銭：26枚。

「開元通寶」タイプのコインの現地の模倣銭、直径12～23㎜（図 2. 24-28）。

７．「サーマーン朝［・コイン］」（コチネフ Б.Д. Кочнев による鑑定）

１）サマルカンド［発行］、ヒジュラ暦280年（894/895年）、イスマーイール・ブン・アフマド。[訳註23)] 直径 24㎜、重量 2.95g。フィルス。[訳註24)]

２）サマルカンド［発行］、ヒジュラ暦 288年（902/903年）、イスマーイール・ブン・アフマド。直径 26㎜、重量 2.7g。フィルス。

３）ブハラ［発行］、ヒジュラ暦305年（918/919年）、ナスル・ブン・アフマド。[訳註25)] 直径 26㎜、重量 2.8g。フィルス（中心に孔あり）（図 1. 33）。

４）サマルカンド［発行］、ヒジュラ暦 315 年（928 / 929 年）、ナスル・ブン・アフマド。直径 23㎜、重量 2.1g。フィルス。

５）ヘラート［発行］、ヒジュラ暦 378 年（989 / 990年）、アブー・アリーとハサン・アリー。[訳註26)] 直径 24㎜、重量 1.85g、フィルス（中心に孔あり）（図 2. 32）。

８．カラハン朝［・コイン］（コチネフによる鑑定）

１）フェルガナ［発行］、発行年なし　ヒジュラ暦 389年（999/1000 年）頃、ナスル・ブン・アリー。[訳註27)] 直径 26㎜、重量 2.0g、フィルス、欠損あり。

２）フェルガナ［発行］、ヒジュラ暦 398（？）［1007/1008］年、ナスル・ブン・アリー。直径 28㎜、重量 3.15g。フィルス。縁に孔あり。

３）発行年と発行地なし（フェルガナ［発行］、ヒジュラ暦 400年［1009/1010］頃）、ナスル・ブン・アリー。直径 28㎜、重量 2.35g。フィルス。

４）オシュ［発行］、ヒジュラ暦 400（？）［1009 / 1010］年、ナスル・ブン・アリー。直径 28㎜、重量 2.85g。フィルス。

５）フェルガナ［発行］、ヒジュラ暦 401［1010/1011］年、ナスル・ブン・アリー。直径 29㎜、重量 3.0g。フィルス。

６）ウズゲンド［発行］［現ウズゲン］、[訳註28)] ヒジュラ暦 416年（1026/1027 年）、カーディル・ハーンとクチュ・テギン、[訳註29)] 直径 26㎜、重量 2.2g。フィルス。破損あり。

７）クズ・オルドゥ［バラサグン］［発行］、[訳註30)] ヒジュラ暦 419 年（1029/1030 年）、マリク・アル - マシュリク。[訳註31)] 直径 25㎜、重量 2.8g、ディルハム。銀。

都市遺跡では、11世紀半ばのカラハン朝時代の銅－鉛製のディルハム約50枚も発見されているが、状態が悪いため、判定が不可能である。

## Ⅱ．歴史的考察

まずは、提示したコインの相対年代に関する問題を考察する。ラドロフ B.B. Радлов、ミューラー［F.W.K. Müller］、ベルンシュタム A.H. Бернштам といったテュルゲシュ・コインの最初の研究者たちは、解読した銘に基づいて、これらのコインをテュルゲシュ［突騎施］可汗国（711～766年）が存在していた時代のものとした（Смирнова 1958, p.543）。[訳註32)]

ベルンシュタムは、テュルゲシュ・コインは10世紀末に至るまでの長い間、流通していたという事実を指摘している（Бернштам 1940, p.110）。25年間以上にもわたって都市遺跡クラスナヤ・レーチカの発掘調査を行なってきたガリャーチェヴァ В.Д. Горячева は、テュルゲシュ・コインの流通期間を 11 世紀まで延長している（Горячева 1988, p.97）。このテュルゲシュ・コインの年代に異議を唱えるのに十分な根拠はない。

新たな発見物によって、すでにスミルノヴァが指摘しているテュルゲシュ・コインの不均一性（Смирнова 1958, p.543）を確認することができる。一部のコインは素晴らしい鋳造技術の例として挙げられ、中国のコインにも劣らない。「この点については、かなりの確率で、可汗国の発行所の１つでは、ある時期に中国の熟練職人が働いていたと主張することが可能である」。そして以下のとおり結論付けている。「上述したことは、タイプⅡ［補図 10. 6-8］とタイプⅢ［補図 10. 9］のコイン（「トゥフ

ス」・コインと片面のみの小型のテュルゲシュ・コイン[訳註33]）はタイプⅠ［補図 10. 3-5］のコイン（大型のテュルゲシュ［・コイン］）の時代に先行するものとみなす確かな根拠となる[訳註34]」。この結論は考古学的なデータにより証明される［とされる］。考古学者によれば、テュルゲシュ・コインは８～９世紀に年代付けられる層で発見されているが、「トゥフス」・コインは７～８世紀の層で見つかる［とされる］からである。これに基づけば、現地［で造られた］最初のコインの出現は、７世紀末、そしていくつかのデータによって７世紀後半に位置付けられた。しかし、私たちは、テュルゲシュ・コインが11世紀まで流通したことを確認できたので、スミルノヴァが第２グループ[訳註35]としている下層の考古学的な層位で発見されたコインは、９世紀と10世紀にも流通していたことが十分にあり得る。

57枚[訳註36]のテュルゲシュ・コインのうち、13枚は、おそらく中国の技術を用いて、石製の型で製造されたものであり、高い鋳造技術を示している。20枚のコインでは銘が熔けて崩れおり、湯口の痕跡をともなっている。24枚は、製造技術が非常に低いものである。それらのコインの銘は推測することしかできず、見た目でも、金属組成が前述の２つのタイプのコインと異なることが明らかである。コインのスペクトル分析がこの観察結果を裏付けることが期待される。これらすべては、このタイプのコインが長い期間にわたって発行されたことを示すだけである。現地コインの導入において、熟練職人が与えられたという中国の支援に関する仮定は根拠があるかもしれない。唐帝国の西域への軍事的な進出がもっとも拡大した時期、648年から719年にかけて、中国の駐屯軍は東トルキスタンの数多くの都市に駐留しており、それには西突厥の都、つまりスイヤブも含まれていた。私たちの考えでは、スミルノヴァは、さまざまなコインのタイプにおける品質の不均一性について、根拠のない結論を導き出している。スミルノヴァは、質が悪いコインをより古いものとみなし、その一方で、中国の支援を受けた後に、コインの質が向上したと示唆している。この主張は、全体的なコイン群の年代付けを著しく混乱させるものであり、［それが誤りであることを］私たちは証明しようと試みている。

コインそのもの以外に歴史的な資料がないので、まずそれらを中国の唐王朝のコインと比較してみることとする。なお唐王朝のコインは都市遺跡アク・ベシムで見つかったすべてのコインの約３分の１を占めている。18枚のコインは、もっとも一般的な「開元通寶」である。ヴォロビィエフ M.B. Воробьев の論文（Воробьев 1963）に基づけば、「開元通寶」のコイン（「［字義は］治世の始まりに広く一般に流通するコイン」）はもっとも長く生き延びた中国のコインであるといえる。開元通寶は、621 年以来、少なくとも340年間にわたって継続的に鋳造されていた[訳註37]。このような広い年代幅は、このタイプのコインによる年代決定という機能を非常に低下させる。

もちろん、そのような長い期間にわたって鋳造されたことで、「開元通寶」は外見において大きく変化したはずであり、実際に変わっている。コインの発行は、必ずしもつねに中央において行われたわけでもなく、その製造（鋳造）技術では頻繁に鋳型を交換する必要があった。それに加え、国外や地方、私的なコインの鋳造、そしてたんなる贋金の存在も考慮すべきである。これらすべてが「開元通寶」の変種の数を増やし、それらの識別を複雑にしている。「開元通寶」コインは、鋳造するときの円周と郭[訳註38]のサイズ、金属の組成、そして最後に、全体的な外見が大きく異なる場合がある。これらの「開元通寶」の特徴に基いて、中国の古銭研究者は発行年代を識別しようと試みている。中国の資料に基づき、ヴォロビィエフは、［開元通寶の］１つのタイプではあるが、コインの外見の部分的な変化によって６つの版[訳註39]を特定している。ヴォロビィエフは、コインのすべての違いを表にまとめており、これに基づけば、検討しているコインは通常660年から760年の間に発行されたと判断できる。

「開元通寶」コインの第１版は、金属の高い品質と精巧な銘によって識別される。直径は 25.6㎜、重さは約 3.73g である。この版の特徴は、まるで指で触ったことでできたような特有のざらざら感があることである。この第１版のコインに含まれ得るのはわずかに２枚である。

660年までには、違法で、私的に鋳造された「開元通寶」の偽造コインの数が非常に多くなり、政府は貨幣の［価値の］切り下げを行った。新しいコインは、それ以前のコインから区別されなければならなかった。第２版は、ウラ面に新たな印、つまり三日月または［小］円が追加されたことによって特徴付けられる。このようなコインは、チュー川流域の

都市遺跡で10枚採集されている。

713年までは、公的な鋳造と並行して、私的な鋳造も存在し続けた。第３版のコインは、それ以前の文字サイズのプロポーションを失っている。その一方、［文字の］相互、そして孔と関連した配置、コインの全体的な外見は同じで、ウラ面は滑らかであるか、三日月をともなっているかのどちらかである。この定義には３枚のコインが一致する。悪銭の流通は全地域で禁止された。規定の重量（3.73g）未満のすべてのコインは回収され、鋳なおされた。しかし、これでも状況は改善されなかった。

732年に大規模なコインの鋳造が行われ、徐々に流通し始めた。この版のコインの外見は、貨幣制度の衰退を示している。ウラ面には、平滑でない場合、それ以前のマークに加えて、新しい組み合わせが登場した。つまり、孔の下方の隅の三日月、点をともなう三日月、孔の郭沿いの線である。コインの直径は24㎜である。そのようなコインは２枚であった。

758～760年には、異なる銘と額面のコインが発行された（例えば１枚は［当］十銭に、別の１枚は［当］五十銭となる）。[訳註40] しかし、これらコインの強制的な交換レートは、貨幣価値の下落を悪化させるだけであった。その時には、新たな貨幣の［価値の］切り下げにおいて、10枚の古い「開元通寶」コインが１枚の新しいコインと交換された。この版の新しいコインは著しく小さくなり、直径は19㎜になる。このようなコインは１枚しか見つかっていない。さらに841年には、ウラ面に文字［漢字］が記された「開元通寶」のコインが発行されたが、チュー川流域の都市遺跡では発見されていない。

「乾元重寶」コイン（［字義は］乾元年間の重いコイン）。乾元の年号は758～759［/760］年に相当する。「乾元重寶」コインには３つのサイズがある。つまり、大型は直径28㎜で、五十銭に相当［当五十銭］；中型は十銭に相当［当十銭］、直径24㎜：小型は直径19㎜［当一銭］。

「大暦元寶」コイン（［字義は］大暦年間のおもなコイン）。大暦（766～779年）は、代宗（763～780［779の誤植］年）の治世に［ほぼ］対応する。

「建中通寶」コイン（［字義は］建中年間に流通したコイン）。建中の年号（780～783年）は、徳宗（780～805年）[訳註41] の治世。３枚のコインが見つかっている。中国の古銭学者、彭信威 Пэн Синь-вей が指摘しているように、[訳註42]「大暦元寶」と「建中通寶」コインはおそらく私的に鋳造されたものであった。[訳註43] 両方のタイプ、とくに後者は非常に希少である（Ивочкина 1975）。

セミレチエの諸都市の住民が唐王朝のコインと出会ったのは７世紀半ば、スイヤブに中国の駐屯地［鎮］が存在していたときである。その当時、チュー川流域の諸都市では商品－貨幣関係［貨幣経済］[訳註44] が発達しておらず、唐代の中国から輸出されたコインで貨幣需要は十分に満たされていた。８世紀の初めには、セミレチエでは、テュルゲシュ可汗国の名の下に、中国の技術を用いて、おそらく中国人職人の助けを借りて現地コインの製造が始まった。それらのサイズと重量は、唐王朝の「開元通寶」コインに一致している。

８世紀の後半にはカルルク可汗国がテュルゲシュ可汗国に取って代わった。751年のタラス川における壊滅的な敗北後、[訳註45] 西域における中国の政治的な影響力は大幅に弱まったものの、年代がはっきりしている乾元［重寶］（758年）、大暦［元寶］（769年）と建中［通寶］（789年）という唐のコインが証明するように、経済関係は維持されていた。[訳註46] 300年間以上にわたって発行されていた「開元通寶」コイン［の想定される膨大な数］に比べると、短期間に発行されたこれらのコインは、［相対的に見て］かなりの数が発見されている［と言える］。８世紀の半ば、中国の「開元通寶」のサイズは劇的に変化した（24㎜から20㎜へ）。中国の「乾元重寶」（758～759年）と「建中通寶」（789年）の小額面［小型？］のコインのサイズおよび重量は、中型のテュルゲシュ・コイン、そして大型のトゥフス・コインのサイズおよび重量に対応している。この事実に基けば、中型のテュルゲシュ・コインと大型のトゥフス・コインの出現の年代を、８世紀末から９世紀初めにかけてとすることが可能である。

現地コインの発行の年代順を正確に確立することが考古学者にとってどれほど重要であるかについては説明する必要はないであろう。多くの場合、これによって遺跡全体の年代が決定される。例えば、アク・ベシム遺跡の第２仏教寺院の発掘調査中に発見されたコインのリストには、８～10世紀のコインが含まれているにもかわらず、寺院の存在［期間］は７世紀に、その廃絶は７世紀の終わり―８世紀の初め―に年代付けられた。建物の年代決定には、床に近接して発見された「神なるテュルゲシュ・カガン

の銭」という銘が記された追加のタムガをともなうテュルゲシュ・コイン[訳註47]の影響が大きかった。そのコインの発行は、誤って、７世紀の後半（？）～８世紀初め、すなわちテュルゲシュ可汗国の成立以前であるとされた。

スミルノヴァは、テュルゲシュ・コインの年代順は確実であると見なされるべきではないという状況について慎重に記していた[訳註48]。「［コインの］タイプの連続性は疑う余地がないが、それがどのようなものであったかは明らかではない」[訳註49]。また、スミルノヴァは、異なる額面のテュルゲシュ・コインの存在という問題に関する最終的な解決を先送りにした。それにもかかわらず、都市遺跡アク・ベシムの発掘調査で出土したトゥフス・コインとテュルゲシュ式コイン[訳註50]は考古学的データに基いて７～８世紀に年代付けられた（Кызласов, Смирнова, Щербак 1958, p.524）[訳註51]。ソグド人の諸都市が、テュルゲシュ可汗国が成立するかなり以前にテュルゲシュ可汗の名の下にコインを発行し始めたということはあり得ないことである。［もしそうだとすればテュルゲシュ］可汗国は、独自のコインを発行し始めたとき、そのタイプをソグド人の植民地から取り入れた［ということになる］。経済的な観点から考えると、この状況はさらに馬鹿げたことに思われる。貨幣経済[訳註52]の導入の最初の段階で、通貨への信頼を構築することが非常に重要であるときに、質が悪く、さまざまな重量とサイズのコインを発行し、時間の経過とともにそれらの重量と品質を徐々に改善する［というシナリオを想定することになるからだ］。最終的には、10世紀末に至るまで大型のテュルゲシュ・コインが存在したことは、大量かつ継続的に発行されたことで説明することが可能であるが、［従来の］研究者のようにトゥフス・コインや小型のテュルゲシュ・コインを７世紀末から８世紀の初めに年代付けるとすると、それらが10世紀の考古学的な層位でも変わらず出土することについてはどのような説明が可能なのか。

これらの鋳造されたブロンズ・コイン［1枚］の購買力はそれほど大きくなく、多くの証拠によれば、決済は［銭の］束で行われていた。つまり小銭［数枚単位］で中国銭やテュルゲシュ・コインと［商品］を交換する必要はなかった。したがって、一部の研究者は、３種類の額面のコインが同時に流通したとし、それが高度に発達した貨幣経済の証拠になると想定したが、それには根拠がないことになる（Бурнашева 1989, p.13）。８世紀後半になると状況は一変する。中国でサイズと重量が縮小された銭および価値が下がった［＝それに見合う価値を持たない］十銭と五十銭のコインが導入され、中国だけでなく、近隣諸国でもインフレに拍車がかかった。この時期、テュルゲシュ・コインの重量とサイズが減じた可能性が高い。中型のテュルゲシュ・コインと大型のトゥフス・コインが流通し始め、その直径と重さは新しい中国の銭とほぼ同じであった。

今や、通常のタイプのコイン［4g弱のコイン］の額面は、少なくとも２倍、または中国の場合と同じように［当］十銭まで増やさなければならなかった。おそらくそのためか、第３のグループ［上記の「C」グループに属する大型］のテュルゲシュ・コインの平均重量が増加した。このことは、珍しいサイズと重量のコイン（Smirnova 1981, タイプⅢ, p.399）[訳註53]が発見されたことの説明にもなり、中国と同じように額面が五十銭［当五十銭］に相当している可能性があった。さらなるコインの直径と重量の減少は、貨幣制度の完全な劣化に結び付けられる。重量とサイズの減少にともなってブロンズ・コインの価値はさらに下がり続けた。これが第３の段階[訳註54]で、おそらく９世紀初めから10世紀半ばにかけて、テュルゲシュ・コインと銘をともなわないコイン、さらには唐王朝のコインの現地模倣銭が流通した時期であった。

唐王朝のコインの現地模倣銭は、これまで独立したグループとして識別されておらず、中国式のコインとみなされていた。このコインのタイプの質の低下の観点から現地模倣銭を考えると、８世紀半ばには中国の「開元通寶」コインのサイズが急激に変化していることに気がつく（24㎜から19㎜に）。同じような直径の変化は、唐王朝のコインの現地模倣銭にも認められる。第１グループの現地模倣銭（23～24㎜）では、依然として文字［漢字］の輪郭は識別可能である。直径19㎜以下の中国コインの模倣銭では、文字［漢字］の場所に凸部のみがあるか、もしくはたんにコインの面にいくつかの凹部がある。このことから、数が多い直径19㎜のグループの発行は８世紀の後半以降に行われたと推定される（Камышев 2000, p.131）[訳註55]。

サーマーン朝の５枚のコインのうち２枚は、おそらく中国式のコインと一緒に本来の目的に使用できるように、中央に孔が穿たれていることに注意する

必要がある。

ウラ面が通常とは異なる技法で製作されていることによって区別される「アルスラン朝」のグループは、提案されているコインの流通の年代順の体系にはうまく当てはめられない。コインの重量とサイズに基づけば、この短命なコインの発行は、８世紀半ばから10世紀半ばまでのいつか、劣化した貨幣経済を活性化させる１つの試みとして行なわれた可能性がある。カラハン朝のコインの方は、原則として年代をともなうことから、年代決定に関する特別な問題は発生しない。

コインがどこで、どれほどの量が発見されているかは､それらの発行地を示しているのかもしれない。例えば、都市遺跡アク・ベシムや都市遺跡クラスナヤ・レーチカで発見された中型のテュルゲシュ・コインの比率は以下のとおりである。都市遺跡クラスナヤ・レーチカは239枚、都市遺跡アク・ベシムは34枚（追加のタムガをともなうもの：４枚［クラスナヤ・レーチカ］と17枚［アク・ベシム］を含む)。テュルゲシュ・コインの総数に占める追加のタムガをともなうコインの割合は、それぞれ1.6％［クラスナヤ･レーチカ］と50％［アク･ベシム］であり、このタイプのコインがスイヤブで発行されたことを示しているのかもしれない。

都市遺跡クラスナヤ・レーチカとアク・ベシムで発見されたトゥフス･コインの割合はほぼ同じだが、都市遺跡クラスナヤ・レーチカで中央の孔が開いていない、つまり実際にまだ流通していなかった８枚の中型と小型のトゥフス・コインが発見されていることは、これらが都市遺跡クラスナヤ・レーチカで発行されたことを示しているかもしれない。ほかのタイプのコインの発行地を特定するのには、まだ十分な情報はない。

したがって、［以下のとおり］結論できる。セミレチエのソグド人の諸都市の住民と中国の唐王朝の「開元通寶」コインとの出会いは、７世紀の後半、これらのコインがいわゆる大シルクロードの通貨であった時期に起こった。諸都市の経済成長と交易関係の発展にともない、独自の貨幣を流通させる必要性が生じ、８世紀の初め、中国コインを手本にしながら、ソグド語の銘とテュルゲシュのタムガ（部族の紋章）をともなうブロンズ製の鋳造コインを発行することとなった。751年のタラス河畔での中国軍の敗北と唐代の中国の経済危機は、通貨流通に変化をもたらした。中国では、銭の基本となる額面［のコイン］の直径と重量が減り、［当］十銭と［当］五十銭のコインが流通し始めた。わずかに遅れて、セミレチエでも同じような変化が起きている。中型のテュルゲシュ・コインとそれらに対応するサイズと重量のトゥフス・コインの発行が始まった。トゥフスの支配者は、オモテ面の銘を変更せず、ウラ面に自らの称号と部族の紋章を記した。

カルルク可汗国は、テュルゲシュ可汗国の下で成立した商品－貨幣関係［貨幣経済］を変えることはなかった。現地の市場は、主要都市で製造されたコイン、そして唐代の中国からのコインで満たされていた。インフレの進行は、コインのタイプのさらなる劣化をもたらしたが、これは、発行された中国コインの模倣銭に明確に見出される。

## 訳註

訳註１）Камышев 2002, p.43 には、テュルゲシュ・コインの分類について、次のように記されている。「近年発見されたものの包括的な研究によって、筆者は、４種類の大型のテュルゲシュ・コインの異種を識別することができた。［これらの］３つは製造の技術と質によって、４つ目はタムガの形によって分類される。A：精緻な銘と高い鋳造技法のコイン（図24）［補図 1.1（Камышев 2002, p.93, No.24)］、B：解読可能であるが、銘の文字が不明瞭なコイン（図25）［補図 1.2（Камышев 2002, p.93-94, No.25)］、C：崩れた銘をもち、縁が整っていない、鋳造の質が悪いコイン（図26）［補図 1.3（Камышев 2002, p.94, No.26)］、D：外側の縁［の幅］が広く、内側の縁と［方孔の］角が短い棒で繋がっているという点で異なるタムガをともなうコイン（図27）［補図 1.4（Камышев 2002, p.94, No.27)］」。本稿でもこの分類の基準が適用されているが、第４のグループを項目として立ていない。なお、タムガとは、古代テュルク語の tamγa「（家畜の所有者を示す）焼き印」に由来する用語である。早い時期に一種の紋章の役割を果たすようになっていた。コインに見られる図形・マークは、テュルク族の発行にかかわらないものも含めて一般にタムガと呼ばれている。

訳註２）補図２参照のこと（Камышев 2002, p.127, Tr-4a)。なお、この重量分布図は本稿で扱っている都市遺跡アク・ベシム採集のコインのみを対象にしたものではないため、数量等については本翻訳と一致しないものの、全体の傾向については対応しているものと考えられる。

訳註３）ソグド文字の銘はここで紹介されている他の３つのタイプと同じで、この但し書きの意味は理解できない。

訳註４）Камышев 2002, p.43 によれば、カミシェフは、このタムガをともなうコインを第４グループとしている。スミルノヴァは、弓形部と方孔が繋がっているこのタムガ

を「AT」と称している（Смирнова 1981, p.397）。これは、弓形部と方孔を一体のものとみなし、ルーン文字ᛏと形状が類似することから、その音価である「AT」をその名称としたものと思われる（補図３参照、Смирнова 1981, Таблица XCIII, 108, 109）。

訳註５）つまり第４グループのこと。

訳註６）このタイプは上の４分類には含まれない。2002年の著書では Tp-5。補図４を参照（Камышев 2002, p.93-94, No.28）。

訳註７）これがルーン文字の「R」を表しているかは不明である。なお、ルーン文字「R」の字形はᛉである。また、ソ連時代に出版され、一般に利用されていると考えられるルーン文字の字形については補図 5.1, 5.2 を参照のこと（Древнетюркский Словаь, Академия наук СССР, Институт языкознания, Ленинград, 1969, pp.XV, XVI）。

訳註８）このタイプも上の４分類には含まれない。なおこのタイプは 2002 年の著書には収録されていないようである。

訳註９）ここから中型に分類され「山」（すなわちルーン文字「R」）形のタムガを持つコインについての記述が再開する。したがって冒頭の「このタイプ」は弓形部分が２つに分かれたタムガをともなうコインのことではないことに注意。

訳註10）Аитова 2000, 127。

訳註11）この文章が意味するところは曖昧であるが、おそらく漢字の「山」のような形をしたタムガをルーン文字の「R」と見なしているものの、描き方が必ずしも正確ではないと言っているのであろう。

訳註12）補図６（Камышев 2002, p.95-96, No.30）の３枚のコイン（Tp-4e タイプ、オモテ面は共通で、異なる３つのウラ面）は、それぞれ図 1. 8、1. 9、1. 10 のコインと同一であると思われる。補図６によれば、ルーン文字の「R」とされるタムガにおいて、三叉になっている部分を上とすれば、中央と右側の線の間に点があることがわかる。

訳註13）原文では、на основном монетном поле。おそらく、弓形のタムガを除いた部分を指すものと思われる。

訳註14）「このマーク」、つまり追加のタムガは、「ほとんどの場合には、主となるタムガの右側に記される」とある。しかしながらこれまで発表されているコインを見る限り（図 1. 8-10、補図６、Л.П. Зяблин 1961, p.45 の図 20. 18）ルーン文字の「R」に似ているこの「追加のタムガ」は、「弓型のタムガ」もしくはルーン文字の「AT」とされるタムガの「左側」か「下側」に位置しており、この記述と矛盾しているように見える。

訳註15）ここでは「B)」となるべき中型のテュルゲシュ・コインに関する説明がないため、具体的な重量が分からないが、2002年の著書では Tp-4д が中型のテュルゲシュ・コインとされており、その重量は 0.9 ～ 3.8g である（Камышев 2002, p.117-118）。一方ここで説明されている追加のタムガをともなうコインは、2002 年の著書の Tp-4e であって、その重量は 1.4～2.5g である（Камышев 2002, p.118-119）。

訳註16）Смирнова 1981, p.410 の誤植と思われる。

訳註17）原文では、арсланиды。

訳註18）Кызласов Л.Р., Смирнова О.И., Щербак А.М. 1958, p.528 と p.529 の間にある図版の10（補図10. 10）。同論文では「タイプⅣ」に分類されている。

訳註19）ルーン文字の「N」は ᛦ、「USH」は ᛠ である。Смирнова 1981, p.541 のマーク No.107（補図８）。なお、補図 5.1, 5.2 も参照のこと。

訳註20）おそらく、ルトベラーゼは、γwβw trnβc と読んだものと考えられる。

訳註21）ババヤルは、この銘文について、「γwβw tk'yn 領主テギン」という読みを提案している（Gaybullah Babayar, Köktürk Kağanlığı sikkeleri Katalogu - The Catalogue of coins of Turkic Qaghanate. Ankara, TİKA, 2007, p.101）。なお、スミルノヴァは「γwβw trnβn 領主タルナヴァン」と読んでいる（Смирнова 1981, p.372.）。意味のある語を読み取っていると言う意味で、おそらくババヤルの読みに従うべきだろう。その場合文字「k」はコインの銘文として刻文されている関係で、通常の形になっていないのだと考えられる。そのためルトベラーゼは -c と読み、スミルノヴァは -n と読んでいる。なお現在では γwβw は xwβw と翻字される。

訳註22）なお、より正確には、それぞれ「当一銭」、「当十銭」、「当五十銭」ということになる。

訳註23）原文では、Исмаил б. Ахмед。イスマーイール・サーマーニー、在位892～907年。

訳註24）原文では、Фельс。中世イスラーム世界で用いられた銅貨のことで、歴史的には「ファルス」と呼ばれていた。

訳註25）原文では、Наср б. Ахмад。ナスル２世、在位914～943年。

訳註26）原文では、Абу Али и Хасан Али。

訳註27）原文では、Наср б. Али。統一カラハン朝第６代ハーンであるアリー（998 年没）の息子か。

訳註28）原文では、Узгенд。現在のフェルガナ盆地にあるウズゲンのこと。

訳註29）原文では、Кадыр-хан и Куч-Тегин。

訳註30）原文では、Куз Орду。クズ・オルドゥはバラサグンのこと。Bosworth は、マフムード・カーシュガリー Maḥmūd Kāšǧarī の記述（Dīvān loǧāt al-Tork, tr. Besim Atalay, Ankara, 1939-41, I, pp.30, 62, 64）に基づき、「その町［バラサグン］はまた、クズ・オルドゥ Quz-Ordu とクズ・ウルシュ Quz-Uluš というテュルク語の名前を持っていた」と述べている（Encyclopædia Iranica, BALĀSĀĞŪN）。

訳註31）原文では、Малик ал Машрик。

訳註32）ここで述べられている「711～766年」について、ス

ミルノヴァは、Смирнова 1958, p.541 で「テュルゲシュ［突騎施］可汗国（711～766年）の存続期間」と記している（「711～766年」という数字は同論文の p.542 でも再度登場するものの、原文にある「p.543」には見られない）。とはいえ、この「711年」と「766年」という数字には明確な根拠はない。おそらく766年の方は、カルルクが勢力を持つのは大暦年間（766～779年）の頃からであるという『新唐書』の記事に基づいているのであろう。ただしこの記事から766年に突騎施可汗国が滅亡したとすることはできない。実際カラバルガスン碑文によれば、９世紀の初めにウイグルがカルルクを制圧したとき、この地域にいた突騎施の支配者を可汗にしたとさえ述べられている。711年は烏質勒の子である娑葛が、東突厥の默啜によって殺害された年である。カミシェフはその年に蘇禄が後継者として立ち、その年から突騎施可汗国が始まったと考えているように見える。しかし蘇禄が歴史上名前を知られるようになるのは715年からであり、それ以前に彼が突騎施のリーダーになっていたかどうかは分からない。

訳註33）ここでは「小型のテュルギシュ・コイン」と記されているが、これもまた、いわゆる「トゥフス・コイン」に分類されるべきものである。つまり、スミルノヴァはいわゆる「トゥフス・コイン」をいわゆる「テュルギシュ・コイン」に先行していると考えている。詳しくは、ジェラルド・クローソン著、山内・吉田訳「アク・ベシム遺跡―スイヤブ」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集、2021を参照のこと。

訳註34）上述の「　」の部分がスミルノヴァの論文からの引用である。（　）の部分はカミシェフが追記したものである。なお、スミルノヴァは、Смирнова 1958 において、クズラソフによるアク・ベシム遺跡の発掘で出土したコインを以下の４つに分類している（補図10）。タイプⅠ：テュルゲシュ・コイン（Монеты Тюргешские）、タイプⅡ：テュルゲシュ式コイン（Монеты Круга Тюргешских）、タイプⅢ：テュルゲシュ式コイン（Монета Круга Тюргешских）、タイプⅣ：テュルゲシュ式コイン（Монета Круга Тюргешских）。その一方で、『Сводный каталог согдийских монет. Бронза』（Смирнова 1981）では、「Хаканы Тюргешей（テュルゲシュ可汗＝テュルゲシュ・コイン）」をタイプⅠ～Ⅳの４つに（補図11）、「γwβ-ы Тухусов（トゥフス・フヴ＝テュルゲシュ式コイン）をタイプⅠ～Ⅲの３つに分類しており（補図７を参照）、Смирнова 1958 のタイプⅣ（テュルゲシュ式コイン）については「未知の可汗」としている。なお、γwβ-ы Тухусов のタイプⅢについては、スミルノヴァは図を掲載していないが、おそらく Камышев 2002, p.96 の No.32 に相当するものと考えられる（補図12）。

訳註35）補図10. 6-8 のタイプⅡのことか？

訳註36）上述の67枚との関係は不明。67枚から第４の変種を除いた３種類Ａ～Ｃについて説明しているのか？

訳註37）960年に北宋が成立しており340年はそのことを想定しているようだ。なお開元通宝が唐の滅亡後、南唐（937～975年）においても発行されていたことはよく知られている。

訳註38）「郭」はコインの縁のこと。

訳註39）原文では、выпуск（発行）。本翻訳では「版」と訳した。

訳註40）これは下の乾元重寶についての説明である

訳註41）原文では、Кэ-цзун。この語が誰を指しているのかは不明であるが、建中は徳宗治世の元号であり、また在位年も一致していることから、ここでは「徳宗」と訳した。なお、徳宗のロシア語表記は「Дэ-цзун」であることから、この語は誤植と考えられる。

訳註42）彭信威『中国貨幣史』上海、1954年、pp.294-295。原文にある Пей Син-вэнь は誤植。

訳註43）「大暦元寶」と「建中通寶」については、王永生「大历元宝、建中通宝鋳地考」『中国銭幣』1996 年第３期、pp.3-11を参照。そこではこれらが、中国本土ではなく安西（クチャ）で鋳造されたとしている。

訳註44）原文では、товарно-денежные отношения。英訳では commodity-money relations となるが、ここでは「商品－貨幣関係［貨幣経済］」と訳した。

訳註45）カミシェフはタラス河畔の戦いの敗北を大きな変化の原因と考えているが、これは誤解であって唐の社会が大きな変化を蒙るきっかけは安史の乱（755～763年）であり、たまたまタラス戦と時代が近かったに過ぎない。

訳註46）上述のように、乾元年間は 758～759年、大暦年間は766～779年、建中年間は780～783年であることから、ここで特定されている「758年」、「769年」、「789年」が何を意図したものかは不明である。なお、建中の「789年」については明らかな誤植であろう。

訳註47）ここで「追加のタムガ」をともなうコインとされているものは上述のそれではない。実際には片面に wn'ntm'x と固有のタムガ、もう一方の面にテュルゲシュの可汗の銘文をともなうコインである。つまりトゥフス・コインと呼んでいるものがそれに当たる。

訳註48）スミルノヴァは、トゥフス・コインがテュルゲシュ・コインに先行していると考えていたことに注意。

訳註49）この部分の引用元については不明。

訳註50）原文では、монеты круга тюргешских。Кызласов, Смирнова, Щербак 1958, p.528 と p.529 の間の図版（補図10）によれば、スミルノヴァは、テュルゲシュ・コイン монеты тюргешские とテュルゲシュ式コイン монеты круга тюргешских の２つに分類している。それゆえ、この部分については、「トゥフス・コインとテュルゲシュ式」ではなく、「テュルゲシュ・コインとテュルゲシュ式」の誤植と考えられる。

訳註51）引用元については確認できなかった。

訳註52）原文では、денежных отношений。

訳註53）このタイプⅢのコインの直径は28㎜、重量は10.77g である。

訳註54）第１段階は 4g ほどのテュルゲシュ・コインの導入、第２段階は大型と中型のコインが発行された段階、その次が第３段階となる。

訳註55）2002年のカミシェフの著書では、開元通宝の模造貨幣は M1、M2、M3、M4 に分類されており、M4 では漢字は確認できず、中央の丸い孔の周りに11個の円状の凹部がある。そしてその半数ほどは直径が 19㎜になっている（Камышев 2002, pp.86-87, Nos.6-9）。

## 文献


Аитова С.М. 2000 - Статистический анализ находок древнетюркских монет в Семиречье и Отрарском оазисе // Известия Министерства образования и науки Республики Казахстан и Национальной Академии наук Республики Казахстан. Серия общественных наук 1（224）. Алматы, РИО ВАК РК, 2000［S.M. アイトヴァ 2000：「セミレチエとオトラル・オアシスにおける古代テュルクのコイン遺物の統計分析」『カザフスタン共和国文部科学省および国立科学アカデミー通報』社会学シリーズ１（224）, pp.125-130』, アルマトイ , RIO VAK RK, 2000 年］

Баратова Л.В. 1995 - Древнетюркские монеты Средней Азии VI-X вв.（типология, иконография, историческая интерпретация）. Автореферат. Ташкент, 1995［L.V. バラトヴァ 1995：『中央アジア６～10世紀の古代テュルク・コイン（型式、図像、歴史的解釈）.［学位論文］要旨』タシュケント，1995年］

Бернштам А. Н. 1940 - Тюргешские монеты. ТОВЭ. Л., 1940［A.N. ベルンシタム 1940：「テュルゲシュ・コイン」『TOVE（国立エルミタージュ東洋部門論文集）』レニングラード , 1940年 , pp.105-111］

Бурнашева Р.З. 1989 - Отрар, отрарский оазис и Южный Казахстан // Нумизматическое исследование по денежному делу южно-казахстанских городов VII-XVII вв. Алма-Ата, 1989.［R.Z. ブルナシェヴァ 1989：『オトラル，オトラル・オアシスと南カザフスタン，７～17世紀の南カザフスタンの諸都市の貨幣発行に関する古銭学的研究』アルマトイ，1989 年］

Воробьев М.В. 1963 - К вопросу определения старинных китайских монет "кайюань тунбао". ЭВ. XV. М., 1963［M.V. ヴォロビエフ 1963：「古代中国の『開元通寶』コインの鑑定の問題について」『EV（東洋碑文学）』15, モスクワ , 1963年 , pp.123-146］

Горячева В.Д. 1988 - Город золотого верблюда（Краснореченское городище）. Фрунзе, "Илим" 1988 ГОД［V.D. ガリャーチェヴァ 1988：『黄金ラクダの都市（都市遺跡クラスナヤ・レーチカ）』フルンゼ,「イリム」, 1988年］

Горячева В.Д. Перегудова С.Я. 1996 - Буддийские памятники Киргизии. ВДИ, 1996［V.D. ガリャーチェヴァ、S.Y. ペレグドヴァ 1996：「キルギズの仏教遺跡」『VDI（古代史通報）』, 1996年 , pp.167-189］

Ивочкина Н.А. 1975 - Монеты первой Восточно-туркестанской экспедиции С.Ф. Ольденбурга, Культура и искусство Индии и стран Дальнего Востока. Л., 1975［N.A. イヴォチキナ 1975：「S.F. オルデンブルグの第１次東トルキスタン探検のコイン」『インドと極東国の文化および芸術』レニングラード , 1975年 , pp.27-38］

Зяблин Л.П. 1961 - Второй буддийский храм Ак-Бешимского городища. Фрунзе, 1961［L.P. ズィヤブリン 1961：『都市遺跡アク・ベシムの第２仏教寺院』フルンゼ , 1961年］

Камышев А. М 1999 - О начале денежного обращения в Семиречье // Новое о древнем и средневековом Кыргызстане. Выпуск 2. Бишкек, Мурас 1999［A.M. カミシェフ 1999：「セミレチエにおける通貨流通の開始について」『古代・中世キルギズスタンに関する新情報』2. ビシュケク , ムラス , 1999 年］

Камышев А. М 2000 - Местные подражания китайским монетам // Известия Министерства образования и науки Республики Казахстан и Национальной Академии наук Республики Казахстан. Серия общественных наук 1（224）. Алматы, РИО ВАК РК 2000［A.M. カミシェフ 2000 「中国コインの現地模倣銭」『カザフスタン共和国文部科学省および国立科学アカデミー通報』社会学シリーズ１（224）. アルマトイ , RIO VAK RK, 2000 年 , pp.131-137］

Кызласов Л.Р., Смирнова О.И., ЩербакА.М 1958 - Монеты из раскопок городища Ак-Бешим（Киргизская ССР）в 1953-1954 гг. Том XVI. Издательство АН СССР. М.-Л., 1958［L.R. クズラソフ、O.I. スミルノヴァ、A.M. シェルバク 1958：「1953～1954年の都市遺跡アク・ベシム（キルギズ・ソビエト社会主義共和国）の発掘調査で出土したコイン」『東洋学研究所学術ノート』16, ソ連科学アカデミー出版社，モスクワ－レニングラード , 1958年 , pp.514-556］

Настич В.Н. 1989 - Монетные находки с городища Красная Речка（1978-1983 гг.）// Красная Речка и Бурана（Материалы и исследования Киргизской археологической экспедиции）. "Илим", Фрунзе 1989 год［V.N. ナスティチ 1989：「都市遺跡クラスナヤ・レーチカ出土のコイン」『クラスナヤ・レーチカ遺跡とブラナ遺跡（キルギス考古学調査団の資料および研究）』「イリム」, フルンゼ, 1989 年, pp.96-120］

Смирнова О.И. 1958 - О классификации и легендах тюргешских монет. Ученые записки института востоковедения. Том XVI. Издательство АН СССР М.-Л., 1958［O.I. スミルノヴァ 1958：「テュルゲシュ・コインの分類と銘について」『東洋学研究所学術ノート』16. ソ連科学アカデミー出版社, モスクワ－レニングラード , 1958 年 , pp.527-551（この論文は、上記の Кызласов Л.Р., Смирнова О.И., ЩербакА.М 1958 所収のもの）］

Смирнова О.И. 1981 - Сводный каталог согдийских монет.

Бронза. Издательство "Наука" Главная редакция восточной литературы. М., 1981［O.I. スミルノヴァ 1981：『ソグドのコインの統合カタログ．ブロンズ』「ナウカ」出版社東洋文学主編集局 , モスクワ , 1981年］

Юсупова С.М 1993 - Древнетюркские монеты отрарского оазиса и Семиречья // Известия национальной Академии наук Республики Казахстан. №5（191）сентябрь-октябрь 1993, "Галым" Алматы［S.M. ユスポヴァ 1993：「オトラル・オアシスとセミレチエの古代テュルク・コイン」『カザフスタン国立科学アカデミー通報』5（191）, 1993年 9～10月 ,「ガリム」, アルマトイ , pp.81-83］

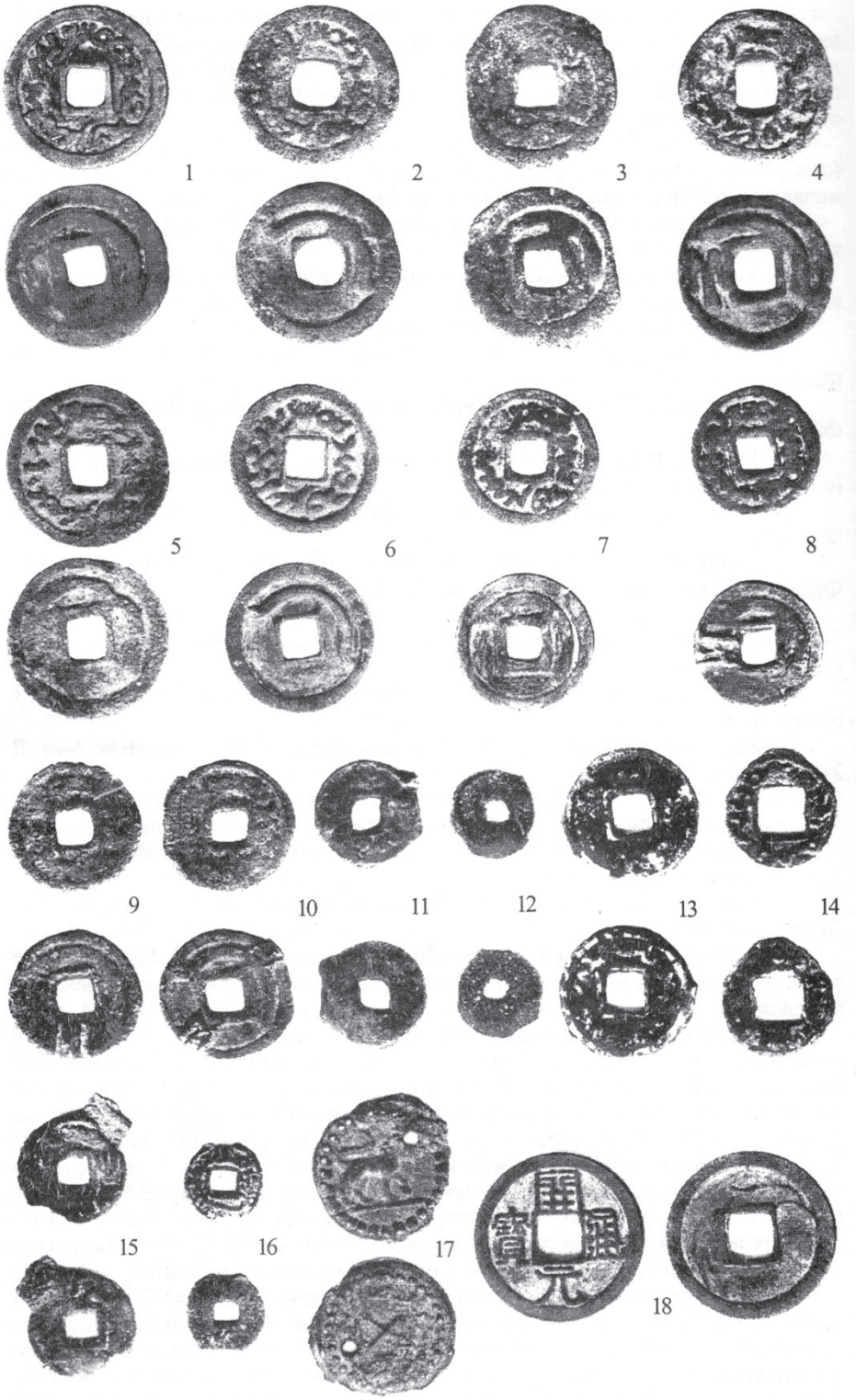



Рис. 1. Монеты с Ак-Бешимского городища. Подъемный материал

図１　アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料（1）

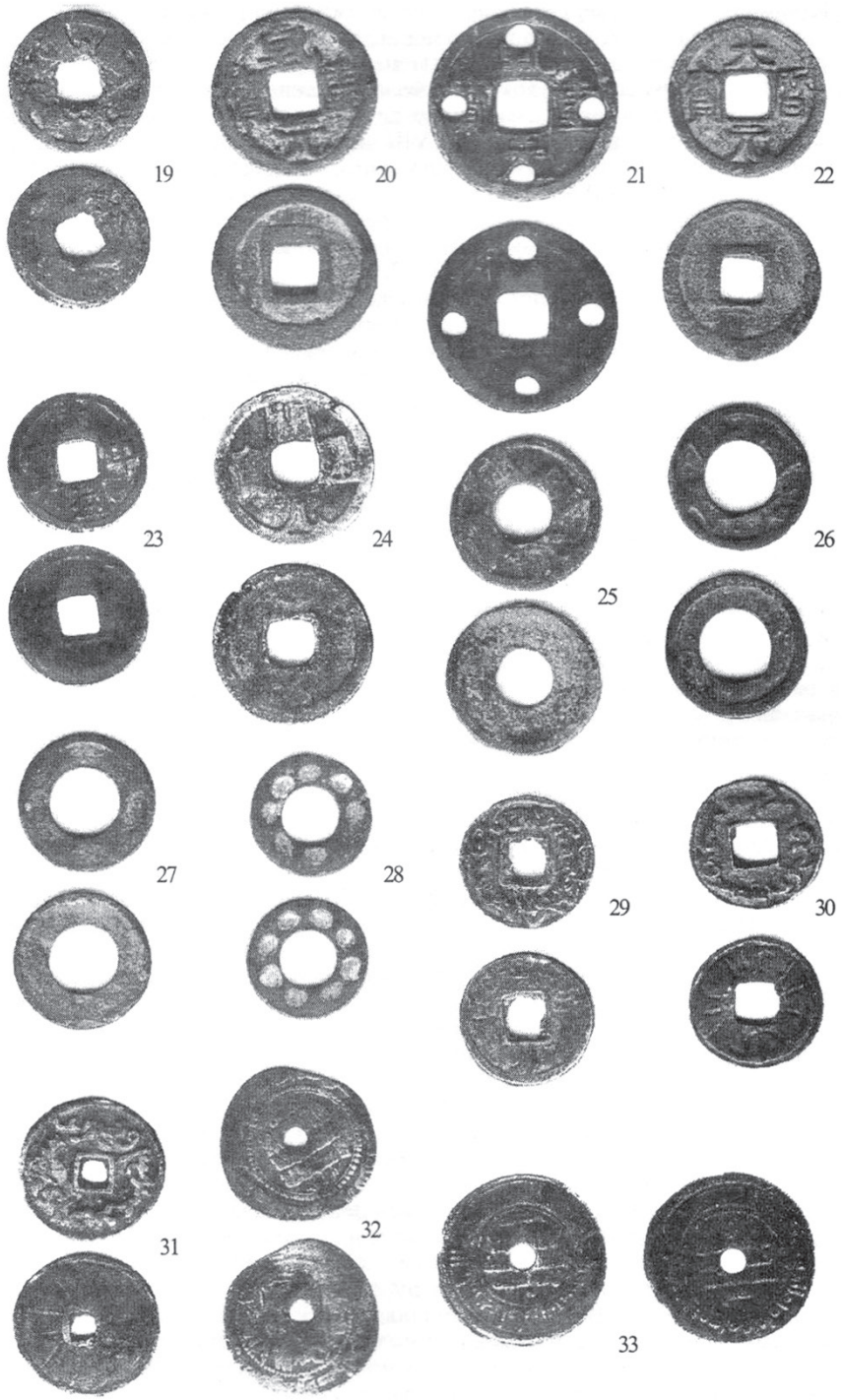



Рис. 2. Монеты с Ак-Бешимского городища. Подъемный материал

図２　アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料（2）

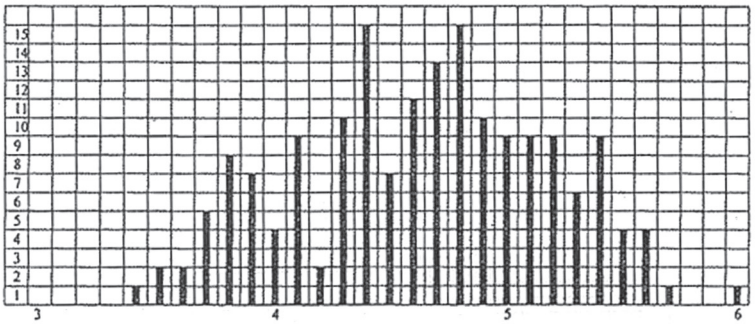
補図 1.1. グループ A（Tp-4a）

補図 1.2. グループ B（Tp-4б）

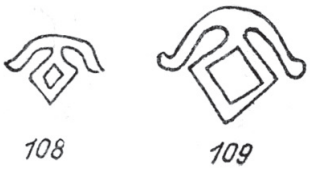
補図 1.3. グループ C（Tp-4в）

補図 1.4. グループ D（Tp-4г）

補図 1. カミシェフによるテュルゲシュ・コインの分類




補図 2. グループ A（Tr-4a）の重量分布




補図 3. ルーン文字の「AT」とされるタムガ

補図 4. タイプ Tp-5

| | Буквы алфавита ДТС | Орхоно-енисейские знаки | Арабские знаки | Уйгурские знаки |
|---|---|---|---|---|
| 1 | a | | | |
| 2 | ā | — | | — |
| 3 | ä | | | |
| 4 | ǟ | — | — | — |
| 5 | b | | ب | |
| 6 | č | | ج ج | |
| 7 | d | | (ض) د | |
| 8 | ḍ | — | — | |
| 9 | δ | — | ذ | — |
| 10 | e | | | |
| 11 | ẹ | | | |
| 12 | ē | — | | — |
| 13 | f | — | ف | |
| 14 | g | | گ ك | |
| 15 | γ | | غ | |
| 16 | h | — | ه | — |
| 17 | ḥ | — | ح | — |
| 18 | i | | | |
| 19 | ī | — | | |
| 20 | ī | | | |
| 21 | ī̄ | — | | |
| 22 | j | | ى | |
| 23 | j̄ | | — | — |
| 24 | k | | ك | |
| 25 | l | | ل | |
| 26 | m | | م | |

補図 5.1. ルーン文字の字形

| | Буквы алфавита ДТС | Орхоно-енисейские знаки | Арабские знаки | Уйгурские знаки |
|---|---|---|---|---|
| 27 | n | | ن | |
| 28 | ŋ | | ڭ نك | |
| 29 | o | | اُو ـُ و | |
| 30 | ō | — | — | |
| 31 | ö | | اُو ـُ و | |
| 32 | ȫ | — | — | |
| 33 | p | | پ ب | و ما |
| 34 | q | | ق | |
| 35 | r | | ر | |
| 36 | s | | س ص | |
| 37 | ṣ | | — | |
| 38 | š | | ش | |
| 39 | ṣ̌ | | — | — |
| 40 | t | | ة ط ت | |
| 41 | ṭ | — | — | |
| 42 | ϑ | — | ت | — |
| 43 | u | | اُو ـُ و | |
| 44 | ū | — | — | |
| 45 | ü | | اُو ـُ و | |
| 46 | ȳ | — | — | |
| 47 | v | — | ڤ ۋ و ف | |
| 48 | w | см. 47 | см. 47 | см. 47 |
| 49 | ʒ | — | غ | |
| 50 | z | | ض ز ظ | |
| 51 | ẓ | — | — | |
| 52 | ž | — | ژ | |
| 53 | ẓ̌ | — | — | |
| 54 | ǯ | — | ج | |
| 55 | ʼ | — | ء | — |
| 56 | ʿ | — | ع | — |

補図 5.2. ルーン文字の字形

補図 6. 追加のタムガをともなうコイン（Tp-4e）

補図 7.1. タイプⅠ

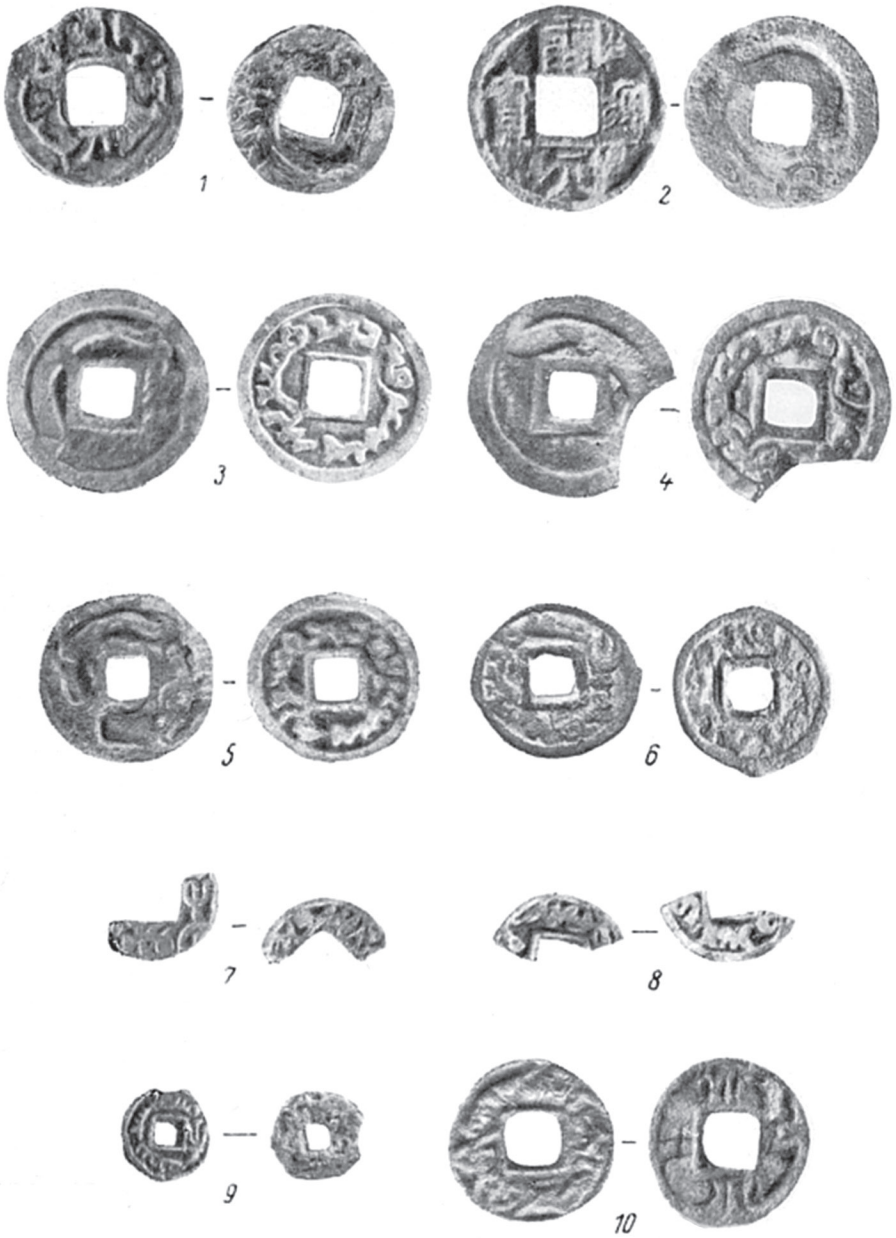
補図 7.2. タイプⅡ

補図 7. スミルノヴァによるトゥフス・コインのタイプⅠとタイプⅡ

107

補図 8. ルーン文字の「N+USH」とされるタムガ

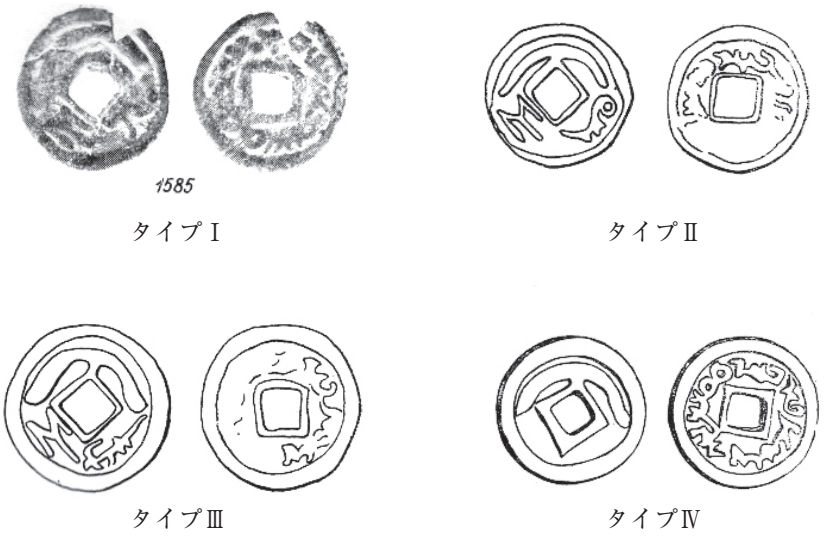
補図 9.「領主テギン」（領主タルナワチ）のコイン




Монеты из городища Ак-Бешим.

*1—2* — китайские монеты династии Тан; *3—5* — монеты тюргешские (тип I); *6—8* — монеты круга тюргешских (тип II); *9* — монета круга тюргешских (тип III); *10* — монета круга тюргешских (тип IV).

補図 10. クズラソフによるアク・ベシム遺跡の発掘で出土したコイン




補図 11. スミルノヴァによるテュルゲシュ・コインの分類（タイプⅠ～Ⅳ）

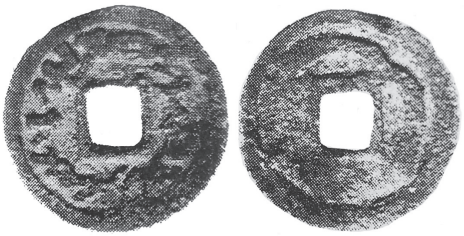
補図 12. スミルノヴァの γwβ-ы Тухусов のタイプⅢと考えられるコイン

1

2

3

4



5

6

7

8

9

10

附録図１

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

附録図２

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

附録図３

31

32

33

附録図４